

映画から何を読み取るか？

わたしがおすすめする授業は川島教授の「英米文学と社会」です。わたしがなぜこの授業をお勧めするかというと、私に新たな視点を与えてくれたからです。

この授業では映画を見た翌週に教授の授業を聞きます。この授業で扱う映画はイギリス映画です。ここで扱われる映画は様々なテーマが隠されていて、見る前に教授からどのような点に注目してみるのかという説明があり、授業後にはそのことについて書いたプリントを提出するようになっています。そして映画を鑑賞した翌週の授業で教授が授業前半に生徒の意見を紹介した後、授業を行うという形になっています。

わたしはどちらかというと偏った考えをしがちなところがあるので、授業の前半で教授が紹介して下さるほかの生徒の考えを聞いていると「そう考えることが出来るのか」「この考えは自分と一緒にだな」と思ったりします。

そんな感想を抱いた後教授の授業を聞いていきます。授業ではまず始めにその映画が取り扱っている時代背景や用語の説目、あるいは登場人物はどういったことを表しているかなどについての説明がなされます。そして私たちに教授がお与えになったテーマについて考えていくという流れになっていきます。

ここである回のことについて紹介したいと思います。いくつか映画を見た中で一番わたしの知的好奇心が揺さぶられたのが『第三の男』(1949年公開、キャロル・リード監督)です。この映画を見る際に教授から与えられたテーマは「善と悪を背景に基づいて考えること」でした。わたしは何とか自分の意見を述べる事が出来ましたのですがほかの生徒と同じような陳腐なものでした。だから教授が紹介して下さる生徒の意見をきいているときは「まあこんなもんか」と思っていました。しかし紹介が終わって教授の考えを聞いているうちに自分がいかに甘い考えを持っているかに気が付きました。なぜなら教授がこの場面やこの人物はこういう風なことを表してくださったのですが、全く考え付くことなどなかったからです。いくつか驚いたり、納得をした点があるのですが、そのなかで「この映画で直線が描かれているのはラストシーンだけだが、これはアンが資本主義の象徴ともいえるホリーの立っていた場所と社会主義のハリーの眠る墓の間にある道路を通ることは両者の確執を表している」ということばです。この言葉を聞いたときにわたしは「なるほど」とおもうとともにここまで注意深く見なければならぬかとおもい、自分の読みの深さがあまりにも浅かったことに恥ずかしくなりました。

今まで私も映画を見るときはそこで扱われているテーマに目を向けながら見ていたつもりでした。しかしなんとなく漠然と考える程度で特定の場面や人がどのようなものを象徴しているかということをして気にしてなどいませんでした。ですからこの授業をさかいにそうしたことにも目を向けるようになりました。それと同時に今まで自分は見ているつもりでいたことも実は見ていなかったのではないかと思うようになってしまいました。

このような鑑賞態度は、私がいかに未熟であるに過ぎず、すでに身に着けているひとにとっては何ともないことかもしれません。だからこの授業もおすすめ授業と言えないではないかと思う人もいるかもしれません。しかし授業のなかで映画のテーマについて考えていくことは独りよがりになりがちな私的意見を改めていくという点においていいと思います。

他人の意見を聞いたり、読み方において教授の意見や話を聞くことで、自分の意見が変わったり、他者の意見に対する反対するなど意見を抱いたりすることはあるはずです。私はそうした機会をより多く迎

えることでひとは成長できると考えています。またこの授業では時代背景やテーマに関する説明などもなされたりするのでより一層理解を深めたりすることが出来ます。

よってわたしは川島教授の「英米文学と社会」を「**my best** 授業」として紹介いたします。